

# 堤清二のロマンとソロバンが演出する 小樽運河再開発のデザイン



▲完成時の半分のスケールになった小樽運河

## 堤清二のロマンとソロバ、演出する小樽運河再開発

西武流通グループが、小樽運河再開発に全面協力を申し出て、運河問題も新たな局面を迎えた。小樽経済復興を狙う地元経済人と、「商文化」演出をめざす西武・堤清二氏の願望が一致するか？そこで、西武の基本的構想を探ってみると…。



堤 清二氏

西武流通グループの総帥・堤清二会長が、小樽運河に強い関心を持ち始めたのは、もう三年も前のことという。もともと文学青年だった堤氏が小樽の古い街並みと、あの運河のたたずまいに、強くロマンをかきたてられたのも無理からぬ話だ。

いろいろな、堤氏の頭の中から運河再開発をめぐる構想が片時も離れなかった、といえはややおバーだが、それほど堤氏が小樽に魅かれていたのは事実だ。折しも折り、小樽の経済的地盤沈下は目を覆うばかり。そんな小樽の現状を小樽子爵が自嘲の意を含めて「小樽は札幌中小樽区だ」という言葉だ。主要な企業は小樽を見限り、札幌へ本社を移転。働き盛りの男たちは職場を札幌に求めるから、小樽の日は、老人と女子供ばかり…。経済復興のこれといった切り札もないまま運河埋め立て論のみが先行、現在に至っている。

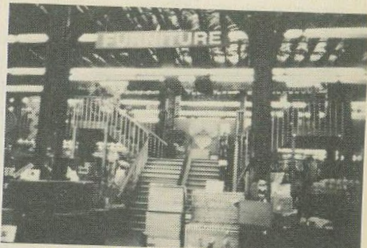
小樽の地形はスコに似ている山に接した街並

### 昨年夏、運河を視察、決断



川合 一成氏

画がもち上がり、やがてデルモンテ街話工場の再利用計画にも飛び火し、これがキャナリーと呼ばれるショッピングセンター。二万平方メートルの地域に、一〇五店の娯楽指向の店が勢揃い。その中に一四店のレストラン、二店のファーストフードショップ、専門店ブティックが軒を接して連なる。周囲がマリナーになっていて、



古い建物をいかしたコストプラスの店内

さらにその後、コストプラスとキャナリーの成功に刺激されて誕生したのがピア39と呼ばれるショッピングセンター。二万平方メートルの地域に、一〇五店の娯楽指向の店が勢揃い。その中に一四店のレストラン、二店のファーストフードショップ、専門店ブティックが軒を接して連なる。周囲がマリナーになっていて、

夏ともなれば、ヨット、ボートが停泊。港まわりの景観に色どりを添える。

たとえば、うしたショップ、海外か

たえば、うしたショップ、海外か

たえば、うしたショップ、海外か

### 運河を視察し、再開発を決断

歴史を語るうえで、タラ、レバは禁物だが、もし堤氏の運河再開発計画が軌道に乗っていたら、現在の運河周辺は、まったく違う風景になっていたかもしれない。そもそも、堤氏が小樽運河に強い関心を持ったのは、そこに「商機」を嗅ぎつけたからではなく、私的な思いが端緒だったという。

樽に見切りをつけ、札幌へ本社を移転し、働き盛り世代の人口流出も深刻だった。これといった経済復興プランを打ち出せぬ状況下、経済人は道路建設に活路を求める以外になかったのである。確かな実績を誇る大物・堤氏の登場を、そんな閉塞感を打破してくれる「救世主」として歓迎したのは、ごく自然な流れといえた。

（もともと文学青年だった堤氏が小樽の古い街並みと、あの運河のたたずまいに、強くロマンをかきたてられた。以来、堤氏の頭の中から運河再開発をめぐる構想が片時も離れなかった、といえはややおバーだが、それほど堤氏が小樽に魅かれていたのは事実だ）

（小樽商工会議所会頭の川合一成氏が、こうした小樽の地盤沈下に歯止めをかけるため、すでに十年も前からあたたためていたのが観光開発だった。小樽を中心とした後志一帯を周遊コースとして開発したい、という構想。その中のひとつに運河の再開発も含まれていた。たまたま西武の堤氏と面識のあった川合氏が、構想の一端を堤氏に語ったのが、こんどの西武流通グループ乗り



▲小樽運河

▼シスコの運河、左側が高級住宅、右がショッピング施設



ランに改装し

ランに改装し

ランに改装し



続きは『月刊クオリティ』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)